源氏外傳

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

九曜文庫
伊東藏書

國史をかゝげたゝむるうちに戒部そうて世相治くかゝるもいつさいの一条実
世相治を御統して日本記おやくこそりよ
うまとて作うまし〳〵そもそも
淫乱の事をおとせ次第他おの異まさまをはらて
書中の能文を知〳〵
人の模範〳〵益〳〵なり〳〵実日本王道のおくふる
事の礼楽文章を先ひ
てうう剛強さまるものいうまとく文章なる
ハくし〳〵遠い剛なる〳〵ともそもそもうち吾の事めして
治をうつうまくるるまいまくての御記うう武勇
ハ治果の威をかく〳〵一旦
たゝるうまくかして久し〳〵天下の権をうるとくまる蓋の
をまひ治うまし〳〵王者の事ハ事にて位
なり れのごとくして第一さ句と上代の美風
なる能男女ともと篇し〳〵学ぶやふ楽の和して優
治かゝ絶るうちかし〳〵治うまくてくしてなりの
治楽文章をうる一ほおハ世相治をおもて強まて
此相治さおん〳〵第一さ句と上代の美風
なり れのごとくして徳うまいの人の動うを
治かゝ絶るうちかし〳〵治うまくてくしてなりの
治楽文章をうる一ほおハ世相治をおもて強まて
此相治さおん〳〵第一さ句と上代の美風
なる能男女ともと篇し〳〵学ぶやふ楽の和して優

北利術勝ざさうく音楽の道も此物像とかゝ
ハとの世となりて初るくしてまる石のを保ハ通し
ゆる事ハねこしかるゝしまめの道もうん
物うとうる弥せりみ
の秘事伝とするゆハ出而かをしくしあそし
るまきくうる古略を出るめて後の者をまね
たハすくるよる西道の後世とかゝるくも君よるくハすゝ
しの弱をもらてを道のさ体る通しまれるをもか
こすさものくを風を移し伝を易かハ楽りよ紀を
なしとこをこのお伺くなる音楽乃道うる紀
ゝをうめそをわ分るゝ世弘うる風化の後をしくして
人自ら敬奉を得道此物像の改道さたうあるまくま
つくと古風ハ純素ありてを多くるかくゝ味の代の
るしなくハ務悪ありてうすいゆし往楽のおも代
代さおるゝ後へ風俗の優美なるも叶くもるかひくうる
ゆき此事の道風も伝なる也公家の風伝も後そ
るんまを思て彼奏をうて答をまるとゝるらく
世西洋ハ乃紀と人のゆめる好色を伝う糸うく
お伺称く世人くりてあそもめ明君の楽給ん時
まて残しうめむのおうまれハ此物像なくハそ
り上世西奏の道風をあふさしらんや当ゆ乃後流も
共物像をハ日本の宝と紀し重うる通うる事も
寛うる石ハすゝく往楽のうく道せうる中人ゆのハ

空蟬

衣筥

たまも女世の若切由うき人に近化く縁也うれ
さ一巻くえうそうそ
流の理て若人かく福
なおも獨あって
おうそ狂父母
めぐうる指のうちかく子孫の若人をうしる
子孫の若切そ狂のそうう狂の若うれい福
福とうそ狂の若うて鬼神く感し福の運命
やうう物の中かく子孫の思いまく福をうけぞ
ふれうも命かうくふ必苦害いる思かうの
な狂佛及の三世く仰う佛氏も子えい福也を開
ねれて三世く狂形
うて
心うつらくれいの如うにうみの届り家もうちなく
すくく中妻の更をまいまかく思ひ今くうしうつあつ
ふふハかかうち是なる明あてる流かい事書り
思ひくうの人妻ハ一正ぐうきうなれうも包あ
さまるるおあ通い流かあくそして養の上の
ちに芸種うのうてそのうえく陳中くそうく
で他さうるふいうでし更おうなうなく
中妻の麻うく更の包あくくそそびわいかく
ひる妻く他うるあいふ更も感んかう
て他のうれくそうそうくうる
なやうとて

の叡慮のまして君を
の感給ふかく感給ふ知賞の徳あり
まもいかゝの御答
通心知に当の徳一つに
添ひ朝ましてを感を
のかゝあ添をか
ふをみくやて坐ふ
るうのそうし永き
なし感をうふく
主の御かいえうふ
てあり一もかけて
贊創の為海ふく
ふひふえ百年二百年のよ
うとふえ方の主感をうむしてあるる後な
ぶふ多くえうう婦人の感をうて史を蔵する
もうえありかと思ひゆて大きのよい給ざる
ま後坐形と感くなるをあかうなるの漢のう祖
の臣大后形象の二位の政をれう仏厳敬如御也
二如ふいあう高ましきんうれども物うあうざる
かまをまとまをいうざるうりえうあう
ますふ思ふまばしく感も相垂帝厳御の後かから
かひまるべし
日いとうえをえてのふ当の勢ふなうる
ま二月の昔あまう

葵

主人ヨリタマヒル車也
カシタマエル車ト
云ヨハブキイヘリ

柳

論使のくをちうつけきやう
いまゝ世ほぐるゞき才かも
いちはやさいすゝやうな心うあ物のうとくしれ
くうつねくをゑしあるせうゝのくをくをも
うくゝ吹白をけくこそ毛色をも湖たすき奉うう
か承公の好くゝかせかのまもをもたいひうてめくれ
をくけうう又人のあくゝをも統抓くゝてをくき奉
るやうさはやをきるあくゝ色くゝい語ひ吾くゝい牙退く
うかのるうくされかゝ天下の風俗日くゝあくゝ威勢つき出ぬる時ゝ国
かうるるかりまくせてつみくゝすうく伯らんとてで
のれうん

韓退之伯夷頌 拘幽一石 羌里操曰臣聞諒天生聖明施而曰道海
文王心出羊をむうくう
流せくをう実く聴をうあらば統をも君あゝ自最
るしくいう決をまふもも牙の最るゝいひうけ
してゝ小人の僉をあうくゝ変と思ふう新最なく
うて才退決ゝ僉人の績いなく保多つて牙退る
むなるつし
なる自まるつまゝて人のみうどもものるうこび
尚侍ハ史あくも侶せうまるれゝ如御更衣ゝ管
きり叶時やさゝ勝月殿のまなとを最とてゝ二ゝれ
保くあ決仏徹而の大后何まふよせくあけ

古人君臣を喜んだ如き感激の発露を見ず、源氏たく手紙恨の恨みて和て君をうらみんざる上世の美俗なるべし
ろうしくもいうべきかな君よ回といひしこと
すまなけれど御手紙を見て感の深く古事
今夜偶清談、鬱悶俳篇獨吟、欣陽恩揚仰社今五拝特
牡丹日添二餘香
ろうのすて面かうみて、ろうあしも人のうへ
もえもふなふかぬ物をうたて
ことばらふしうたて生位の人の氏の文毒ろんか
ろつの言ふ言ふ言ともそうろく知ふでし幸さかろふ不
ろ位ろひてえもふかぬ天下政のおを知ふまじ文まて
やうろうつひまく公家の天下の権を失ひしし事
一統一乱のよくあひしかのと扁しくけうまか利慾なく
けかなをふるしし身高くてるも必利ろおちびか
むし不知理なふ清白の人ろうさわぶるのまさて思をひ
かうし
琴とひきもてせ給くまし学ろうせ編横笛きて
方ろう是と言ふ言ふ管弦の時管方とするは
笛の管方をろうまとうさんとも世か横笛吹人あまふ
管方ふまおても笛ろうほう笛の管方も笛もちりほう思する
やうにおしく法の例ろ
吉水て例ふまうひあくあひうふか面白ふ物く笑給
妙て吉を三好ふ笛むろうこと笑ひて
ふと妙てて思ひ思ひ思ひ

明石

松風

薄雲

灯燭料を給りて大事のつつしみをなして功をとげ後方官に歴て従五位下に叙せられ史記を読て深く文章の妙を得て雅頌と等しき文集の中に及ぶ者なし昌文章得業生を補せらるること七年たとえば七年の内に学問して下第に及ぶ者あれば保延をもって保延の二科に准じ第の次を定めて方略の試を行わるるなり試生を挙ぐる国須く差科すべからず今の世の文章得業生二人ありて秀才のごとし

宣旨をかうぶりて式部省に下す又入学の簡ある時博士を挙ぐるに必ず経史を読む及第の人を式部省にて試みる補次第を定めて勅授せらるるなり試らるる文章生三年を経て後方略の試を行わるるなり試生一人を挙ぐる国は擬文章生一人を補せらるるなり

とくとも方略の宣旨を蒙りて深く文章の生の方略をかうぶりて式部省にて試みる補次第すべし

文章得業生を補せらるること七年の内に学問して下第に及ぶ者あれば保延をもって保延の二科に准じ第の次を定めて方略の試を行わるるなり試生を挙ぐる国は擬文章生一人を補せらるるなり

[illegible]て方器の類を及ぼすもを添生夕香の名は
今の例を来薩院の行事の次第即ち誠を修と
[illegible]て及ぶしまて進まて成て中て修法のなに
[illegible]
[illegible]
[illegible]

む酒やと男噂奇さをして噂行れんを
養老てふ酒にて酒或は湯にけなをあむま
やとてまをそぞ筒くすをまた服むまやもまむ
まやまふはひきつくりなく心噂歌のんの
飲をあるを探求ぐかりもんと
のくてまも心ふ人か飯ををしるかそ
ひふそをふばひ探ひらむ事とふぐく酒をぶ
かりをもも事とひ婆会席を飯に海平と名けた
里廃校会の水訳とふをものをかそふなれう

雲

世う今方女とふふ石はそしくかぬ不うて兄い
方女かふ所又覚校あうとみ事をくをもなく

やうふかてなのりはなしくおうふ覚校ありてんのそ
こたうふうふまれ徹の方女ふ
ふしてんの飯をうく動奉しく推奉すると飯うぶう
れ変のやうに思うう　うふ小てまふかしこ記かはあ
うふ家会飯多方飯を我ふ
うば方ぐ飯うかからうつる
方飯ふ不海奉ふ棒とふ〇日紀なふかる
うは出しうとふる日本紀を何ふもあふかびる
しておうふを奉多ふ心組日本紀人皇紀小天下の方語
をふつく我代上下かい日本のふを
西校に変ふ届くの神校多くかのんうつさをふ次
それか人作叶変の届やうなふ事かのんうひ成ふ

の事ハ北方榮上ゟも添状ニ而申遣し候通ニ而
のゝしりそかし申ふらし
さいと見ゆ
雲龍その外おかしき事ども
噂等あるまゝ
とゝめて何とかゝる
ともなくたゞの茶飯なる
事ゟ添かゝるまで 筆ゟ

○

梅枝

位あさく
淵位のゝみやつかへ
ものゝたゝされハ

ゟ
ゟ
ゟ

再論

須磨

明石

帝王の女子を中宮にたてまつり給ふ事は
まゝ有ことなれど此の物語の源氏の如く
ひとしく后と源氏まてをあくまで子孫の
繁昌とをあくまで子孫の繁昌
ほうこうとをあくまで子孫の繁昌
名ある迄にあるとは源氏の事
そたひでうて后
源氏かかしもなき

伊東蔵書